

# 「惟喬親王物語」の展開と『土佐日記』

——『伊勢物語』紀貫之筆作試論——

吉 山 裕 樹

## Ⅰ 『土佐日記』と「惟喬親王物語」

『土佐日記』の承平五年一月八日条と二月九日条の二箇所、在原業平の故事にふれた記事が見られることについては、契沖『勢語臆断』以来注意されてきているところである。まず、一月八日条を見てみよう。

八日、障ることありて、なほおなじところなり。こよひ、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山の端にげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおもほゆる。もし海辺にてよまましかば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」ともよみてましや。いまこの歌をおもひ出でて、ある人のよめりける、

照る月の流るる見れば天の川出づる湊は海にざりける

とや。(引用は藤谷林氏校注・日本古典全書『新訂 土佐日記』による)

前年の十二月廿九日から大湊に停泊して正月を過ごし、さらに天候等の条件で出航できずにいる場面である。月が海に沈むという見慣れぬ景が眼前にある。月は山に隠れるものだというのが都人の通例の観念であろう。貫之の脳裏には、山に隠れる月を詠んだ歌がいくつか浮んだであろうが、そのなかで特に『伊勢物語』八十二段に見える業平の「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」という奇抜な発想の歌が想起される。そして、海上にふさわしく「照る月の」の歌が詠まれることになる。「照る月の」の歌に「天の川」ということばが使われているのは、『古今集』雑上において「飽かなくに」の歌の二つ前に配列されている「あまの河雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞながるる」(八八二番)という歌を踏まえていることによる(福井貞助氏「土佐日記と在原業平」文程論叢・第3巻第3号)といちおう考えられるが、同じ『伊勢物語』八十二段に見える「天の河」という地名による連想が強く働いたことによる(藤谷林氏「土佐日記全注釈」)と見てよかろう。よって、後述の二月九日条の記事などをも考え合わせると、「飽かなくに」の歌が特に想起されたのは、単に歌の発想の奇抜さによるというよりも、『伊勢物語』八十二段に見える業平の故事に対する強い志向が貫之にあったことによると考えてよいと思われる。

次に、二月九日条を見てみよう。

九日、<中略>かくて舟曳き上るに、渚の院といふところを見つゆく。その院、昔を思ひ

やりて見れば、おもしろかりけるところなり。しりへなる岡には松の木どもあり。中の庭には梅の花咲けり。ここに人々のいはく、「これ、昔名高く聞えたるとところなり」

「故惟喬の親王の御供に、故在原の業平の中將の、

世の中にたえて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし

といふ歌よめるところなりけり」。いま今日在る人、ところに似たる歌よめり。

千代経たる松にはあれど古の声の寒さはかはらざりけり

また、ある人のよめる、

君恋ひて世を経る宿の梅の花昔の香にぞなほ匂ひける

といひつつぞ、都の近づくをよろこびつつ上る。〈以下略〉

六日に難波に着き、七日から淀川を上りはじめて三日目のことである。「その院、昔を思ひやりて見れば」「これ、昔名高く聞えたるとところなり」と、繰り返して述べて紹介しているのは、これまた『伊勢物語』八十二段に見える、業平（右馬頭）が惟喬親王に供奉して渚の院で「世の中に」の歌を詠んだという故事である。眼前の渚の院の景と過去の記事に触発されて詠まれた「千代経たる」「君恋ひて」の二首の歌は、「古の声の寒さはかはらざりけり」「昔の香にぞなほ匂ひける」と、現在の景より過去の記事へ惹かれる気持を詠んだもので、この場面は全面的に業平の故事へ思いを馳せたものであり、ここでも業平の故事に対する強い志向が窺えると言えよう。

ちなみに、この二月九日の故事の典拠に関しては、『伊勢物語』八十二段に依るものではないという異見（山田清市氏『伊勢物語の成立と伝本の研究』第二篇第三章第一節、福井貞助氏・前掲論考）もあるが、『伊勢物語』八十二段（現存の形のままでないにしても）に依るといふ見解（市原愿氏『伊勢物語生成序説』第三章第一節、萩谷朴氏「書か」に今は従う。れざる土佐日記第四の主題』『日本文学の伝統と歴史』所収）

上のごとく、『土佐日記』のような短篇のなかに二箇所も業平の故事、それも「惟喬親王物語」と呼ばれる『伊勢物語』八十二段に見える惟喬親王にまつわる故事が引かれていることには、単に引用によって場面構成が行なわれたという事情以上の、もっと深い関連が予想されるのであるが、『土佐日記』と「惟喬親王物語」の関係は先の二つの事例に止まらないようである。福井貞助氏（前掲）は次のごとく指摘しておられる。先に引用した一月八日条の前日、七日の記事には、「歌よまむと思ふ心あ」る人物が貫之一行を「破籠もたせて」慰問し、歌を大声で詠みあげたのに対し誰も返歌せずにいると、「ある人の子の童」が代わりに返歌しようとした、という記述が見える。福井氏は、かように誰かが代わって歌を詠むという形は、「惟喬親王物語」八十二段に見える（『古今集』四一八・四一九番にも見える）右馬頭（業平）の歌に対して親王が返歌できずにいた時に、代わりに紀有常が返歌した場面を思わせると述べられ、「このあたり総考するに、土佐日記では貫之は前述の惟喬親王の物語を頭において記している事はかなり明らかである」と述べておられる。また、市原愿氏（前掲書・第二節）は次のような指摘をしておられる。すなわち、前年の十二月廿九日からの大湊停泊中の記事に見られる、土佐の国人の厚情に深謝しながらも帰洛の思いを

如何ともすることのできなかつた貫之の心境は、同じく「惟喬親王物語」八十三段に見える、親王に供奉して水無瀬に行っていた馬頭の、親王の厚意に謝しながらも早く自邸に帰りたいと願う心情と通じていると述べられ、「したがって『やまのはにげて』の歌の発現に先立って、作者の意識には伊勢物語が重層的なエコーを奏でていたはずである」と述べておられる。

さて、以上のように『土佐日記』執筆時の貫之に『伊勢物語』の「惟喬親王物語」が強く意識されていたことは、二箇所及ぶ引用、それに福井・市原両氏御指摘の影響関係によって確認できるのであるが、そのように意識された理由として、早く契沖は「土佐日記はわづかなる一卷なるに、業平の事を引ける事三所見えたり。貫之のしたはれたる事知ぬべし」（『勢語（巖斷）』）と、貫之の業平尊敬思慕の念を指摘している。また、萩谷朴氏は「紀氏の過ぎし日の栄光に貫之の心を回帰させる最も強い絆が、大叔父有常によって結ばれているからであり、貫之が和歌の世界において、業平に尽きせぬ執着を抱いているのも、歌人としての業平の天才に対する憧憬もさることながら、言葉にこそ出さね、貫之の生涯の支えとなった紀氏家門の誇りというものを確かめる気持が、常にしっかりとそこに繋がっていたからであると考えられる」（『土佐日記（全註釈）』）と、惟喬親王が同じ紀氏である有常の妹静子所生であることによる貫之の氏族意識などを指摘しておられる。かような御指摘は当を得た従うべきものと考えられるが、小論では少し異なった観点から『土佐日記』と「惟喬親王物語」との関連の意味を検討してみたいと思う。

## 2 「惟喬親王物語」の展開

『土佐日記』一月八日・二月九日両条に引かれた「惟喬親王物語」八十二段は三つの場面によって構成されている。まず二月九日条に引かれた渚の院での桜見の場面、次いで交野に狩をして天の河の河原で酒宴を張る場面、そして一月八日条に引かれた水無瀬離宮に帰っての酒宴の場面である。続いて同じく八十三段では、前半部に水無瀬から京の惟喬親王邸に帰っての酒宴の席で早く自邸に帰ろうとする馬頭（業平）を引き止めようとする親王が描かれ、後半部には出家して小野に隠棲した親王を馬頭が正月に訪問するさまが描かれる。惟喬親王が帝王の器量を有しながら藤原氏の圧迫によって政治的不遇を余儀なくされたというイメージが強く印象づけられているので、八十二・八十三段の物語はそのように政治的に疎外された惟喬親王主従が自然に遊び、風流に耽るさまを描いた物語と読ませる体のもとなっている。そして、そこに鮮明に浮びあがってくるのは、過不足なく調和のとれた主従の交流である。しかし、そのように風流三昧の日々を送った主従の交遊も、八十三段後半部に描かれた惟喬親王の出家によって終わりを告げられることになる。

ところで、『伊勢物語』のなかには、この「惟喬親王物語」八十二・八十三段、直接には八十三段後半部の惟喬親王出家譚を受けて作られたと思しい章段が二つある。それは十六段と八十五段である。まず、八十五段から見よう。

むかし、男ありけり。童より仕うまつりける君、御髪おろしたまうてけり。陸月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。むかし仕うまつりし人、俗なる、禪師なる、あまた参り集りて、陸月なればことたつとて、大御酒たまひけり。雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。みな人酔ひて、雪に降りこめられたりといふを題にて、歌ありけり。

思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積るぞわが心なる

とよめりければ、親王、いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり。

(引用は石田穠二氏訳注・角川文庫『新版 伊勢物語』による)

この八十五段は、単に「親王」としか記されていないこと、「童より仕うまつりける君」と史実の惟喬親王・業平の年令関係とは逆になっていることなど、「惟喬親王物語」と直接につながるものではない。しかし、雪という自然条件や、宮仕えが親王に伺候することの障害になっていることなどの一致点が八十三・八十五両段に指摘でき、出家した親王を「陸月にはかならずまうで」という設定などから考えて、この八十五段は八十三段後半部を受けて、その後日譚的色彩を濃く有していることも確かであろう。そして、この段の主題は、思いがけない親王の出家による馬頭の悲嘆が主題である八十三段後半部とは異なって、「もとの心」を失わないで親王を見舞い、雪が降り積もって帰れなくなって、親王の側に伺候できるようになったことを「わが心なる」と言い切る男の、出家した親王に対する変わらぬ「心」に認めることができる。仕えていた主君が出家隠棲して政治的に全く無力な存在となってしまえば、その主君を見捨てて顧みなくなってしまうのが人の常であろう。それを「もとの心うしなは」ないでいる男の「心」のありようを強調して描くことによって、そこに反俗的姿勢が強く打ち出されているわけである。

次に、十六段を見てみよう。

むかし、紀有常といふ人ありけり。三代の帝に仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時移りにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にも似ず。貧しく経ても、なほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のことも知らず。年ごろあひ馴れたる妻、やうやう床離れて、つひに尼になりて、姉のさきだちてなりたる所へ行くを、男、まことにむつまじきことこそなかりけれ、今はと行くをいとあはれと思ひけれど、貧しければ、するわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう、今はとてまかるを、なにごともいささかなることもえせで、つかはすこと」と書いて、奥に、

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり

かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜のものまでおくりて、よめる、

年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君を頼み来ぬらむ<以下略>

この十六段は、出家した人物に対する対応を描くという、八十五段との類似性を有しているが、

さらに「惟喬親王物語」の登場人物であった紀有常を主役としていること、「のちは世かはり時移りにければ」という記述に「惟喬親王物語」に描かれた親王の政治的疎外および出家という事情を読み取ることができることなどを考え合わせると、ここでもその後日譚の体を取ったものと捉えることができよう。そして、また十六段には八十五段とほぼ同様の主題を読み取ることができる。すなわち、零落しながら「むかしよかりし時の心」のままである有常、八十五段の男の「もとの心」と同様、状況の変化にもかかわらず変わらぬ有常の「心」を主題としているのである。そのような「心」の持ち主であるからこそ、「まことにむつまじきこと」はなかった老妻に何とか餞別を贈ろうとすることにもなる。零落しそうになれば権門に追従して身の保全を計ろうとし、貧窮すれば「まことにむつまじきくもない人物に餞別を贈ろうなどとは考えないのが人の常であるならば、ここでも変節せぬ有常の「心」のありようを強調して反俗の姿勢が示されているわけである。

上の十六・八十五両段については、かつて論じたことがある（拙稿「惟喬親王物語の展開」『国文学』第74号）ので詳細はそちらに譲るが、「惟喬親王物語」八十二・八十三段を受けた上の両段が、八十二・八十三段の惟喬親王主従の間では当然の前提であって、問題にもならなかった人の「心」の問題を特に主題として取りあげていることは注目に価する。

### 3 『土佐日記』の精神的志向

ところで、第一節で引用した『土佐日記』一月八日条の前後の記事にも、繰り返しの「心」を問題として取りあげた箇所が見られる。いくつか例をあげてみると、

- 守からにやあらむ、国人の心のつねとして、今はとて見えざるを、心あるものは恥ぢずになむ来にける（承平四年十二月廿三日条）
- 鹿兒の崎といふところに、守の兄弟、またこと人これかれ、酒なにともて追ひ来て、磯に下りあて、別れがたきことをいふ。守の館の人々のなかに、この来たる人々ぞ、心あるやうにはいはれほのめく（同十二月廿七日条）
- 医師、ふりはへて、屠蘇・白散、酒くはへてもて来たり。心ざしあるに似たり（同十二月廿九日条）
- これかれたがひに、「国のさかひのうちは」とて、見送り来る人あまたがなかに、藤原のときぎね・橘のすゑひら・長谷部のゆきまさらなむ、御館より出で給ひし日より、ここかしこに追ひ来る。この人々ぞ心ざしある人なりける。この人々の深き心ざしは、この海にも劣らざるべし（承平五年一月九日条）

といったごとくである。土佐を離れるにあたって、あとに残る国人たちの対応に貫之が大きな関心を抱いていたことは、わずかの部分に上のごとく繰り返しの「心」「心ざし」にふれていることに見て取れる。「心あるやうにはいはれほのめく」「心ざしあるに似たり」といった言い方を

経て、一月九日条に至って「この人々ぞ心ざしある人なりけり」と満足し、「この人々の深き心ざしは、この海にも劣らざるべし」と誇張した最大級の讃辞を贈っている。土佐守を離任した貫之に土佐在住の人々が「深き心ざし」を示したところで何らの利益も期待できない。したがって、人の常として前国司に対する「心」「心ざし」は移ろってしまうのが通例であろう。そこで、なお変わらぬ「心」「心ざし」を示した人物に貫之は高い評価を与えているわけである。

この「心ざしある人」と対比的に描き出されているのが、末尾近くに現われる貫之の留守宅を預かった人物である。

夜ふけて来れば、ところどころも見えず。京に入りたちてうれし。家に到りて、門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家に、預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。(承平五年二月十六日条)

先の土佐の「心ざしある人」が遠く離れてゆく貫之に「深き心ざし」を尽したに対し、この留守宅を「預けたりつる人」は再び貫之との交際が予想されたにもかかわらず、変わり果てた「荒れたる」心「心」を示す。このあたりのことにふれられて、小宮豊隆氏は、「この意味から言えば、『土佐日記』の内容の中枢を形づくるものは、亡児に対する追懐の悲嘆といふよりも、或は人間の世の頼み難なさや浅ましさに対する悲嘆であるといった方が、もっと適切であるかも知れないと思われる」(『土佐日記の研究』『日本文学講座』第5巻所収)と述べておられる。人の「心」が利害に左右されやすく、移ろいやすいことに対して強い歎きや憤りを持っていたからこそ、先に見たように変わらぬ「心」「心ざし」を示す人物に対して誇張とも思えるような讃辞を贈ったのであろう。

貫之が、このような人の「心」のありように対してはなほだ敏感であったことは、一月七日条の記事にもよく表われている。この一月七日条には、まず長櫃に食物を入れ、若菜を添えて「浅芽生の野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり」と詠んで貫之に寄越してきた「男につきて下りて、住みける」「よき人」の控え目な心尽しが描かれる。次いでそれに対して、「割籠もたせて」貫之を見送りにきたものの、本心はただ「歌よまむと思ふ心」ばかりで、「ゆくさきに立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ」と大声で詠みあげた人物の浅薄な心が皮肉な筆致で対比されて描かれている。老境にあった貫之が自分に対して示される人の「心」に神経質になっている姿が思い浮ぶようであるが、以上のごとく、『土佐日記』において首尾一貫して人の「心」「心ざし」が問題とされていることは、「惟喬親王物語」の二箇所<sup>1)</sup>に及ぶ引用とともに注目すべきことだと思われる。

#### 4 『土佐日記』および『伊勢物語』十六・八五段の精神的志向

さて、前節で見た『土佐日記』において人の「心」の問題が作品の「内容の中枢」を成していることと、第一節で見た『土佐日記』における「惟喬親王物語」の影響との関係はどのように考えたらいいであろうか。確かに、『土佐日記』に「惟喬親王物語」が引用された箇所、一月八日

条にしても二月九日条にしても、そこには船旅の途中で実見した風景を契機として「惟喬親王物語」の故事が想起され、それにちなんで新たに歌が詠まれるという、詠歌についての記事が見い出せるのみで、そこには人の「心」「心ざし」についての記事が見い出せるわけではなく、両者には何らの関連も想定すべきではないのかも知れない。しかし、一月八日条の前後に、前節で見たように人の「心」「心ざし」を問題とした記事が頻出していること、第一節でふれたように福井貞助・市原愿両氏がそのあたりの記事に「惟喬親王物語」の深い影響を指摘しておられることなどを考え合わせると、やはり両者の間に何らかの関連を認めたくなる。

貫之にとって、『伊勢物語』のなかでも特に「惟喬親王物語」が深い意味合いをもっていたであろうことは、第一節でふれたように萩谷朴氏が指摘された貫之の氏族意識などに照らし合わせて明らかであろう。したがって、貫之が「惟喬親王物語」に読み取っていたものは、業平（右馬頭）の歌の秀抜さに限られるものではあるまい。第二節でふれたように「惟喬親王物語」には政治の世界から疎外された親王、その親王になお付き従う右馬頭・有常の主従の理想的な姿が具現されていた。そのような人間関係に貫之が共感を覚えたであろうことは想像に難くない。そこでは格別人の「心」を問題とする必要のない理想的な主従関係があったわけだが、貫之が自分を取り巻く現実に目を転ずれば、そのような理想的なありようは望み難かったであろう。そして、そのような理想的な人間関係を頭に置いて理想ならざる現実に向うと、人の「心」「心ざし」を問題にしたり、また、せざるを得なくなる。『土佐日記』において、人の「心」「心ざし」が盛んに問題とされている記事に挟まれて、一月八日条に「惟喬親王物語」に見える故事が引用されていることの意味はかような文脈上に捉えることもできるのではあるまいか。表面上は歌について述べておいて、「惟喬親王物語」の故事を引用することによって、そこに理想的人間関係を暗に指示していると見ることもできるのではないかと思うのである。

また、同じく「惟喬親王物語」の故事が引用された二月九日条の「君恋ひて世を経る宿の梅の花昔の香にぞなほ匂ひける」という貫之の歌にしても、惟喬親王主従に見られた理想的な人間関係は彼らとともに失われ、変らないのは自然だけだ、という嘆きの気持をそこに読み取ることもできよう。萩谷朴氏は、『土佐日記全注釈』においてこの「君恋ひて」の歌の注釈部分に、同趣向であるということで貫之の代表作の「人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」（『古今集』四二番）という歌を引用され、「自然や物象は信じられても、人情は当てにならないというのが、貫之の思想に深く根差している人生観」であると述べておられるが、小宮豊隆氏が『土佐日記』の「中樞」に「人間の世の頼み難なさや浅ましきに対する悲嘆」を指摘しておられたことなどをも考え合わせてみた時、貫之にとって人の「心」の頼りなさ、移ろいやすさに対する嘆きは、はなはだ根深いものであったと見てよからう。このような人間認識があったからこそ「惟喬親王物語」という文学作品に一つの理想を見出し、『土佐日記』のなかで人の「心」「心ざし」を問題としつつ、「惟喬親王物語」の一部を前後二回にわたって引用して、記述の底

流で両者を結びつけるという構成が取られたのではないかと思うのである。

さて、『土佐日記』のかような精神的志向性が、第二節で見た『伊勢物語』十六・八十五段に認められたものと同質のものであることは一見して明らかであろう。確かに、両作品で称揚されている、状況の変化にかかわらず節を屈せぬ「心」「心ざし」というものは、言ってみれば人受けのよいお題目のようなもので、格別特殊なものではなく、むしろ今も昔もはなはだありふれたものと言ってよかろう。したがって、両作品に同質の精神的志向性が認められるからと言って、そこに何か意味を求めようとするのは無駄であるかも知れない。

しかし、かような「心」「心ざし」を『土佐日記』や『伊勢物語』十六・八十五段のような文学作品にまで結晶させるには、その背後に人の「心」の頼り難さに対する余程の深い嘆きの裏打ちがなければならぬ。さらに、『土佐日記』にしても、『伊勢物語』十六・八十五段にしても、先に見たようにそこで問題とされている「心」「心ざし」は「惟喬親王物語」と深い関連をもっていると考えられるのである。この二つの線を辿ってゆくと、その交差する地点に、『土佐日記』や和歌作品から帰納される、人の「心」の頼りなさに対して深い悲嘆を抱いていた貫之、和歌の先達業平への思慕や氏族意識などによって「惟喬親王物語」に対する強い志向をもっていた貫之が浮かびあがってくる。すなわち、『土佐日記』の作者であった貫之は、そのまま『伊勢物語』十六・八十五段の作者としてもふさわしい人物と思われてくるのである。

なお、蛇足として付け加えると、『伊勢物語』十六段で紀有常が主役となっているのは、同族である貫之の親近感によるものとも考えられる（貫之作者説の立場から貫之の有常への敬慕・親近感については、山田清市氏が前掲書・第二篇第三章第二節で詳論しておられる）のであるが、そこで有常が「まことにむつまじきこと」はなかつた老妻にさえも餞別を贈ろうとするのは、『土佐日記』の「荒れたる」「心」しか見せなかつた留守宅を託した人物にさえも「いとつらくは見ゆれど、心ざしはせむと」した貫之の処世術を思わせる。或は、有常の姿に貫之自身を投影させたものであろうか。

## 5 『伊勢物語』貫之筆作説

『伊勢物語』の作者については古来色々と論議があるが、近年紀貫之筆作説が諸先学によって唱えられるところとなっている。早く折口信夫氏に貫之筆作の御見解があるということである（高崎正秀氏『物語文学序説』が、「伊勢物語研究」参照）が、近くは森重敏氏「伊勢物語の構造と定位(三)」(『国語国文』第30巻第9号)、長谷川政春氏「伊勢物語成立論序説」(『国学院雑誌』第67巻第9号)、中田武司氏『王朝歌物語の研究と新資料』「第二章伊勢物語」、山田清市氏『伊勢物語の成立と伝本の研究』「第二篇第三章 作者と成立の問題」等の御論考に貫之筆作の立論がそれぞれの立場で成されている。小論は、これら諸先学の驥尾に付して、貫之筆作の可能性について考えてみようとした貧しい試みのひとつでしかないが、ここでいちおうの見通しを述べておきたい。



作者の問題と同様、『伊勢物語』の成立についても色々論議があるが、現在最も説得力を有しているのは片桐洋一氏の御説（『伊勢物語の研究』〔究研究篇〕）だと思われる。片桐氏は、『群書類従本業平集』、『在中将集』、『雅平本業平集』という業平集諸本等を駆使されて、『伊勢物語』の成立過程に『古今集』成立以前のもの、『群書類従本業平集』成立時のもの、『在中将集』・『雅平本業平集』成立時のもの、それ以後のもの、数次に渡る段階を想定しておられる。『伊勢物語』の原型が『古今集』に先行し、その撰集資料のひとつであったとするならば、当然撰者の一人であった貫之の手許には『伊勢物語』の原型があったと見てよい。『古今集』の撰者であり、『土佐日記』を執筆した文人であることを考えると、貫之がその『伊勢物語』の原型に何らかの手を加えることがあったと推測することは、それほど突飛なことではあるまい。『伊勢物語』貫之筆作説（当然作者の一人でしかないわけであるが）が魅力を有する理由はやはりそのあたりにある。

さて、片桐氏の御説に従えば、「惟喬親王物語」八十二・八十三段は、現存の形のままではないにしても、『古今集』以前に成立していた原型章段と目されているものである。そして、その「惟喬親王物語」の内容を受けて展開された十六・八十五段は、その原型章段に次いで成立した、すなわち『群書類従本業平集』成立時に増補されていた章段と考えられているものである（片桐氏・前掲書第五篇第一章）。この十六・八十五段と同次元に成立したと考えられているものには、ほかに初段や四十段などがあるが、これらの章段を並べてみると、或共通した性格をそこに認めることができる。第二節で見たように、十六・八十五段は、「むかしよかりし時の心」、或は「もとの心」を前面に押し出して、主題を明確にした物語と考えられたわけだが、初段では末尾に「昔人は、かくいちはやきみやびをなむ、しける」、四十段でも末尾に「むかしの若人はさる好けるもの思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」というコメントが付されており、「いちはやきみやび」「好けるもの思ひ」といった主題を分りやすく強調するという共通の傾向が認められるのである。

片桐洋一氏は、右の四十段の「むかしの若人は云々」という記述について、「むかしの若人」＝「今の翁」とされ、「この物語は『今の翁』がみずからの『若人』たりし時の事を語る体で物語られていたと私は思うのである」と述べられて、「その意味において、伊勢物語の本質を、若年の成年式に臨み、己れの経験を語り聞かせる翁の回想述懐態度と、成年・成女を前にしての対立意識においてとらえようとされた折口信夫博士のすぐれた直観に深い敬意を表」しておられる（前掲書・第一章）。確かに、先の四章段に特徴的な、主題を分りやすく強調する傾向は、翁が若者に語るという体の根底にあると考えられる教訓的・教育的発想と結びつくもののように思われる。

ところで、萩谷朴氏は、『土佐日記』を特定の権門勢家の子弟である年少初心の享受者のために和歌入門の教科書として著作されたものであろうと推測しておられる（『土佐日記創作の功利的効用』〔国語と国文学・第40巻第10号〕）。『伊勢物語』一・十六・四十・八十五段の性格を上のごとく捉えると、これらの章段が増補された時点での『伊勢物語』には、萩谷氏が『土佐日記』に想定されたと同様の事情を認めることができるのではあるまいか。すなわち、『古今集』の撰集資料として手許にあった原型章段の「二

条后物語」四・五段、「東下り」九段、「狩の使」六十九段、「惟喬親王物語」八十二・八十三段等の優れた物語をもとに、新たに一・十六・四十・八十五段等の教育的発想による物語を創作・増補して、『土佐日記』執筆時に程遠からぬ晩年期に、権門の子弟に供するために貫之が『伊勢物語』をまとめたのではないか、というのが小論の臆測の結論である。『伊勢物語』を統一的作品として定着させるには初段の存在の意義が大きかったと考えられるが、そのような章段を増補して、必ずしも統一ではなかったと推測される『伊勢物語』の原型から、統一性をもつ作品にまとめあげるといふ重要な役割を貫之が果したのではないかと思うのである。

以上、屋上屋を架するがごとき臆測に終始してしまったが、かように資料の乏しい分野においては、色々と臆測を積み重ねるのも全く無意味なことではないと思うので、あえて拙一文を草した次第である。なお、貫之が創作したと臆測される章段は、右の四章段のようなものばかりではないが、論の筋道をはっきりさせるため他の章段にはふれなかったことをおことわりして置く。

〔付記〕 脱稿後、稲賀敬二先生に御一読頂き、貴重な御教示を賜わった。ただ、筆者の生来の愚鈍さと時間的制約のゆえにその御教示を本稿に反映させることができなかった。今後の課題としたいと思うとともに、先生の御芳情に深謝申し上げる次第である。